



【聖書が教えるリーダーの模範】

聖書本文:使徒の働き9章26-31節/暗唱聖句:ヨハネの福音書12章24節

説教者: 鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

愛する信仰の家族のみなさん！ 去った一週間もみんなお元気で、お変わりなかったでしょうか。新型コロナのデルタ株の感染が今までとは違って全国的に爆発的に感染が広がっています。今週中に愛知県もまた4度目の緊急事態宣言になりそうですが、何よりも今週一週間も、共に続けてコロナ予防にしっかり気をつけ、みんな心身ともに主が見守り、助けて下さるよう切にお祈り申し上げます！

また、緊急事態宣言になると、基本オンライン礼拝がメインとなりますが、どうしても家で家族がオンラインで礼拝を捧げる状況が難しい方々のために、続けて1部と2部(オンライン)分散した礼拝も続けますので、礼拝の参加を希望される方はご参加下さっても構いません。続けて緊急事態宣言のうちには、各牧場で直接集まれなくても、ZOOMなど利用し、続けて祈りと励まし合いながら、お互いに支え合って歩まれますようにお祈り申し上げます。

先週1週間の国内ではコロナ感染の爆発的な急増のニュースが、海外の世界のニュースで一番 이슈になったのはアフガニスタンのニュースだったでしょう。8月16日先週月曜日に、イスラム主義武装勢力であるタリバンによってアフガニスタンの首都カブールを制圧され、陥落されたということで、外国人含め、大勢のカブールの市民たちはいのちをかけた、空港から脱出で、大混乱の状況をみなさんもお覧になったと思います。その中特に、とても残念で、衝撃的なニュースだったのは、アフガニスタンのアシュラフ・ガニ大統領の姿でした。ガニ氏は、世界銀行出身の経済専門家であり、大統領の前に、エリートとして、留学し米国の大学で学び、カブール大学学長で教鞭をとった文化人類学者の優秀な人材として、国連事務総長候補にまでも名前が挙がった人であり、後アフガニスタンで財務相時代に汚職(おしよく)対策を進めた清廉(せいれん)なイメージで2014年、2019年に連続大統領として、当選しましたが、今回首都カブールがタリバンに陥落される寸前に、だれよりも、一番早く大統領であるガニ氏は自分の家族と一緒に、一早く海外脱出し、逃亡(とうぼう)しました。それだけではなく、その際に多額の現金を持ち出し、4台の車に現金を大量に積み込んで行きましたが、ヘリコプターに積み替えたがすべては入りきらず、一部は滑走路(かっそうろ)に残したまま飛び立った。国の一番責任者であり、指導者であったのにもかかわらず、国や国民を守るべき人物がだれよりも一番早く、国と国民を捨てて、逃げたことに卑怯者であるという批判が国内外から相次いでいます。

ガニ氏が脱出した後の声明(せいめい)で、「自分が国に残れば、カブールの街は破壊され、多くの人々の流血を避けるための仕方のない決断だったと説明でした。最終的にまで汚名(おめい)を残してしまった指導者であるのではありませんか。かれよりも、そのような指導者として立てたアフガニスタンの国民がかわいそうで、今のように国全体が混乱と混沌にさらされ失うことになったしまったことは20年間守ってくれたアメリカ軍の撤収という無責任のせいより、このような立てられていた自分の国間違っって一人の指導者の結果と影響がこんなに大きく決定的ではないかとわたしは思っております。

リーダー！ どんなリーダーと出会い、一緒にするかによって我々はその影響を受けるようになるでしょう。聖書を読んで見ると、神はキリストを信じる我らの信仰が成長し成熟され、みんながキリストの弟子となり、信仰のリーダーとなる事を神は喜ばれ、望んでおられることが分かります。そして、多くの神の信じるリーダーたちの姿を教えて下さっています。もちろん、みんなそれぞれ各タイプやスタイル、個性が違う面がありますが、今日、この時代を生きている我々に神様は聖書を通していったいどんなリーダーとなるように教えて下さっているのでしょうか、初代教会の素晴らしいリーダーと言わば、ほとんどの方々は、断然(だんぜん)にパウロを上げますが、私は個人的にはもっとも素晴らしいリーダーの存在として、バルナバが大好きで、とても大切なリーダーの模範を我らに見せて下さっていると信じます。なぜなら、パウロが初代教会のリーダー的な存在になるために、バルナバの存在がなかったならば、あんなに認められ、用いられることは出来なかったかも知れません。パウロのように、ペテロのように目立っていた存在じゃなかったかも知れませんが、実は、全てキリスト教として、我らみんながこのバルナバのリーダーの模範を見習うべきであり、実際当時多くのキリスト教や教会に影響を及ぼしていた存在であるため、もう一度我らもバルナバの模範を共に見習いたいと願います。

そして、聖書ではどんなリーダー、指導者になる事を望んでおられ、教えて下さっているのでしょうか。

聖書的に言う時、偉大な指導者、すばらしい指導者像は決して自分が成功する指導者ではありません。聖書が言っている偉大な指導者はほかの人を成功させる指導者です。それを聖書的な概念で言うと“仕える人”です。つまり、しもべのようにほかの人のために、仕える指導者を言います。私は今の時代に一番切実に必要とされるのがこのような指導者だと思っております。今日は聖書に出てくる初代教会の一人の指導者バルナバがまさにそのような指導者の姿だったと信じております。

<1. バルナバはどんな人物？>

彼は誰でしたか。今日の本文を含めて使徒の働きの何箇所からバルナバについて記されていますが、バルナバに対する最初の紹介は使徒の働き4章に記録されています。

「キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。(使徒4章36-37節)」

まず、この人の本名(ほんみょう)はヨセフだと書いてあります。おそらく彼の親は自分の息子がヨセフのような人になってほしい願いを込めてヨセフと名づけたと思います。彼の出身地はキプロス(今日トルコの下にある島「キプロス共和国」)だと記されています。そこは小アジア近辺のサイプロスという島です。パウロの当時初代教会の時のキプロスはとっても裕福な町として有名だったそうです。鉱山(こうざん)があり、イチジクと麦の農作が豊作(ほうさく)で、オイルとハチミツの産地でした。そういうわけでキプロス出身だと言われると‘金持ちである’と思わされるほどキプロスは豊富な資源(しげん)を持っていた島でした。このキプロス出身のバルナバはおそらく相当の財産持ちの家門の人に違いないことを想像出来ます。彼はきっと五旬節の聖霊の神の降臨の時に、クリスチャンになった可能性が高く見られています。そして、教会に加わって、信仰生活をする中で、使徒たちからあだ名がつけられましたが、それが「バルナバ」でした。ある意味、あだ名は親によってつけられた名前よりもっと自分の特徴がよく表されていると思います。みなさんのあだ名はなんでしょうか。あだ名には自分の特徴や自分が良く表されていると言えるでしょう。

すると、バルナバというあだ名の意味は何だったのでしょうか。使徒の働き4章には(慰めの子)だと書かれています。つまり、彼は励ましの子として多くの人々を慰め、励まし役だったことがわかります。人々は彼に会うと人生の勇気を得ます。新しい力を得ます。そういうわけで人々は彼のあだ名を「MR. 慰め、MR. 励まし。」と名づけてあげたのではないかと思います。バルナバという名前を通して彼は励ましの人であったことがわかります。

使徒の働き4章37節によると彼はどんなことをしますか。自分にあった畑を売って、その代金を神様に捧げるため、使徒たちに献金を持って来ました。初代教会はどんどん大きくなっていく一方でした。多くの人々が次々と救われます。やることもたくさん増えました。教会に必要とされる献金も、救済するためにもたくさんの献金が必要でした。このような困難な時に教会の指導者たちが話し合う時、自分の財産を売ってまで献金したバルナバの献身は教会にとってどれだけ大きな励ましだったの間違いありません。教会の必要をみてためらわず、兄弟姉妹たちを助けるために、自分の畑をささげたこのバルナバの献身は神のビジョンに向って成長していく初代教会と信徒たちに大きな励ましと勇気と力になったでしょう。慰めの子、励まし者というあだ名はこの人にふさわしいのに違いないと思います。

<2. バルナバとパウロの関係を通して現れるバルナバの人格>

次は、パウロとの関係をとおしてバルナバの人間性を知ることができます。使徒の働き9章ではサウロの改心の出来事とその後に起こった内容です。パウロ(paulusと「小さな者」の意味、サウロの 로마式の名前:異邦の使徒としての宣教の献身の為)の名前の前は、サウロ(求められた者の意味to ask, to demand, to beg for)という名前でした。ダマスコの道でイエスに出会ってからパウロになります。彼がクリスチャンになったのです。そしてパウロはどんな行動をとりますか。使徒の働き9章26節です。「エルサレムに着いて、サウロは弟子たちの仲間に入ろうと試みましたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れていた。」

パウロは最初の教会だったエルサレム共同体に行っただけのクリスチャンたちと交わりたがりませんでした。パウロもクリスチャンになったので、ほかのクリスチャンたちと交わりたがるのも当然です。しかし、エルサレム教会の信徒たちの反応はどうでしたか。以前キリストを信じる前に、主の教会とクリスチャンたちを激しく迫害していたパウロに対する先入観のため、みなパウロを警戒し、恐れていました。パウロがキリストを信じ、福音の為に従い働こうとする弟子になったこともだれも信じないで、疑っていたわけです。事実、このような反応は当然だとも思われます。なぜなら、パウロはクリスチャンになる前、どんな人でしたか。

使徒の働き9章1-2節(「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻(いきま)き、大祭司のところに行って、2ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。」)で、以前パウロはクリスチャンに会うたびに逮捕して牢屋に入れる残酷な迫害者でした。なのに、いきなりある日、教会に現われて‘私もクリスチャンになりました。私ももう変わりました。’と証する人を容易く受け入れることはすぐにできなかったはずですから、パウロがクリスチャンになったのにもかかわらず、教会共同体に受け入れられず、むしろいじめられ、苦しんでいる時にだれが登場しますか。そこにバルナバが出て来ます。

そしてバルナバがしたことは何ですか。パウロに対する身分保証人になったのです。(使徒の働き9章27節)

“みなさん、本当です。私が保証します。この人パウロは本当のクリスチャンになりました。ダマスコで生きておられるイエス様に出会ったのは事実です。彼は変えられ、イエスに出会ってからすでに福音を宣べ伝えています。彼がまことにクリスチャンになったのを私が保証します。”

みなさん、誰かに対して自分のすべてをかけて、責任をおって、身分を保証することは決して簡単なことではありません。これによってほかの人々から逆にいじめられたかも知れません。バルナバもパウロと同じ部類だと誤解されののしられたかも知れません。しかし、バルナバは自分が損することも、大変な目に合う事さえも覚悟した上で、パウロのために彼を代弁し、保証人になったのです。

それでどうなりますか。28節を見ると、「サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行(い)き来(き)し、主の御名によって大胆に語った。」バルナバの代弁を通して、パウロは使徒たちと一緒に交わることができたのです。初代教会の正式メンバーとし

て大胆に信仰の生活が始まったのです。

パウロはバルナバのおかげで主の福音のために用いられ始めました。パウロがキリスト教会共同体においてイエス・キリストの使徒として受け入れられ、福音のために働いた背後には、彼を信頼してくれた人、彼を立たせてくれた人バルナバの存在がいたことを私たちも覚える必要があります。つまり、バルナバがいなかったら、伝道者パウロもいません。彼はパウロにも気落とさないように励まし慰め、教会の人々にも過去のどうであって主にある兄弟を温かく受け入れるように励ます存在でした！みなさんは今まで、だれかを自分の持っていた先入観のため、批判する側に立っていましたか。それとも人を守り、人を立たせる側に立っていましたか。私たちもほかの人に対して深い事情を分かっているのに、人の表や勝手な先入観だけで判断したり、批判することがあってはいけないことをよく学ばされます。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん、今日も慰めの人のバルナバのような存在が主の教会にも多く必要ではありませんか。バルナバがいないため、多くの可能性のある人々が結局落胆し、傷つけられ、さらに寂しい思いをして、主の教会を離れてしまう場合がどれだけ多くあるでしょうか。神様のために彼らの信仰とビジョンが羽ばたく前に折れてしまう場合が我らの教会にはないようにしましょう。

1890年、120年前、オランダの一人の青年がいました。彼は真実な牧師の家庭の息子として生まれ、彼も成長して神学を勉強していた神学生でした。情熱をもって彼は献身し、一生懸命教会で奉仕をします。そして貧しい人々に訪ね、伝道に熱心でした。

ところが、彼が奉仕始めた教会はそんなに良い教会ではなさそうでした。はじめての説教に対してへたであることは当然なのにもかかわらず、教会の人々は彼の説教に対してむやみに批判しました。否定的で批判的な人々が多かったこの教会はこの若い働き人を立たせることができなかつたのです。彼は結局そこで挫折してしまいます。人々はしきりにほかの仕事のみつけるようにと言われ、彼はほかの仕事をするにします。

ほぼ信仰をも失われてしまう危機でした。しかし、彼は信仰だけはあきらめませんでした。彼は絵を描き始めます。それで彼は世界的な画家になりました。その人が**ブイセントヴァンゴッホ(Vincent van Gogh)**です。このゴッホさんの伝記にこのような興味深い記録があります。

“この人が持っていた情熱と想像力を見ると、彼がもし続けて伝道者として献身したなら、世界で偉大な説教者になる可能性が高かつたはずだ。しかし、人々は彼を待ててくれなかつたのだ。その結果、人類は偉大な画家(が)を得たが、偉大な説教者は失った。”結局、彼は37歳に自殺してしまいました。

一人の励ましと忍耐を持って一人を信頼しつつ、立たせて上げることこそが、どんなにすばらしい指導者を立たせることにつながるのかその可能性を考えたことありますか。神様の御前で私たちもバルナバのような役割を果たす者になることを主は望み、喜ばれると信じます。我々の教会にもバルナバのような方々は多い教会だと信じていますが、これからもみんながともにそうなりますようにお祈り申し上げます。

<3. 一緒に働くことを通してビックピクチャーを描いていたリーダーバルナバ>

主の福音がユダヤ人を越えてギリシヤ人にも福音が伝えられると、まず**アンテオキア**という都市でクリスチャンが多く増えました。**使徒の働き11章21節**です。**「主の御手が彼らとともにあつたので、大勢の人が信じて主に立ち返つた。」**

11章22節をみると、**エルサレム教会がバルナバをアンテオキアに遣わします。このアンテオケに素晴らしい教会が立たされるという可能性がある**と彼らは判断し、このために指導者であるバルナバを派遣したわけです。続けて**11章23節**をみると、アンテオケに行ったバルナバはアンテオケ教会を立て上げ、信徒たちが主を固く信じるように立たせました。

「彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であつた。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。」(使徒11章24節)

多くの人々がアンテオケ教会に入って来ました。教会は成長し続け、毎週多くの人々が教会に入って来ました。とうとうバルナバはこのまま、この時代のヒーローになれるチャンスでした。教会を立て上げ、多くの人々が主を信じ、教会に入って来て、多くの人々に賞賛され、みとめられ、尊敬される存在でした。なのに、ここで、バルナバはそのまま、満足しません。

パウロを思い出し、パウロを探しに動きます！「バルナバはサウロを探してタルソへ行き(使徒11:25)」

主の教会が大きくなっていく時、バルナバは主の福音の同労者パウロを考えました。信徒たちも増え、やることも多くなつたでしょう。‘こんな時、パウロがいたならな。パウロなら、私とともにすばらしく神の働きの協力ができるのに。。。いや、むしろ、私よりもっとすばらしく働けるかも。自分の能力には限界がある。しかし、パウロはこの人たちを育てて、さらにイエス・キリストの偉大な弟子たちをたくさん育てることができるすばらしい賜物と可能性を持っている人だ。パウロはこのごろ何をしているのか。’と思っていたバルナバはパウロを探しにタルソへ行ってパウロと一緒にアンテオケに戻ってきます。そして、**二人はアンテオキア教会で1年間くらい大きな群れをともに牧会したので。要するに、チームの働きをしたのです。**

一人ではなく、主の教会と福音宣教のため、ともに協力しともに働いたわけです。それだけではなく、いろんな人たちも呼びかけともに働いたのです。

愛するみなさん、バルナバは自分一人でも主の働きが続けてできたかとも思いませんでした。しかし、バルナバは今だけではなく、神の国の拡大のため、主の福音のさらなる前進と救いのため、キリストの弟子たちをさらに育てるために、ともに働くことの大切さを描き、その模範を他の教会に証しをし、伝えたのです。そして喜んで、ほかの人を立たせることが上手な真のり

一ダーでした。

このバルナバという人の歩みを研究しながら彼について二つに要約することができます。

バルナバはよく自分を知っていた人だと思います。そういうわけで神様の御前で自分がやれることとできないことをよく分かっていました。彼はやれることを探して心を尽くして働きました。教会において一番大切な必要はなにか。神様の働きのためにはどれだけの財源が必要なのかについて考えました。そういうわけで、彼は自分の財産の一部を惜しみなく主にささげることができたのです。彼はサウロという一人の青年が入ったとき、その青年の可能性を信じて‘私がこの人を顧みてあげよう。この人のサポートになる。’と考えました。みんなが彼を疑うとき、彼の後見人(こうけん)になって、彼を支え、立たせてあげたバルナバは自分のやれることをしたのです。

同時に彼は自分の限界を良く知っていて認める人でした。アンテオキア教会にリバイバルが起こった時彼は、“私、一人ではできないのだ。ともに働く人がさらに必要なのだ。”とあってパウロとともに働きを提案し、ともに働きます。アンテオキア教会はバルナバの限界を越えてパウロとともにさらなる神様の働きに力を発揮することができるようになりました。

バルナバは大きくビジョン(ビクピクチャー)を見れる人でした。

もし、バルナバが自分だけ考えていた人だったのなら、パウロという人を危険なライバルとして思った可能性が高いでしょう。パウロが来たら、アンテオキア教会での自分の立場があやふやになり、自分のリーダーシップが狭くなる知れないと思った可能性もあります。しかし、バルナバは今のままで満足せず、彼は今よりもっと大きくビジョンを見ました。**主の教会全体を考えていたのです。イエス・キリストの教会、神の御国を考えました。神の御国がさらに広がるために、キリストの教会がさらに力強く建てられるため、自分一人ではなく、パウロのように、ともに働くべきであり、これから主の働き人をますますたてあげなければならないと、そのため、私が仕える人になってあげようと考えました。自分をおろし、自分を後になっても、さらにほかの人をキリストの弟子として立たせ、キリストの福音の有益のため、喜んで自分をささげる準備が出来ていた人、その人がバルナバでした。**

実際に、使徒の働きを読みながらおもしろい点を見つけましたが、**使徒の働き11章と12章にはバルナバとパウロ順に書かれています**が、これは**使徒の働き13章7節まで続きます**。ところが**使徒の働き13章43節からはその順序が逆になって、パウロとバルナバとなります**。それからはずっとパウロとバルナバです。後には実際にもっと影響力のある指導者としてパウロが登場されます。

みなさん、その時バルナバはどんな気持ちだったのでしょうか。もちろん、聖書に特に何の記録はありませんが、私は疑いなくこのように思います。パウロが影響を与える指導者として上がってから、人々はバルナバよりはパウロを探したと思います。自分が立たせたパウロがさらに用いられる指導者になっていくことをながめながら、バルナバはむしろ感激し、神様に感謝をささげたと信じます。“**神様、この足りない者をおしてパウロを立たせてくださった神様をほめたたえます。**”パウロをたたえた後、主に栄光を帰しながら、舞台のうしろに身を隠すことが出来た立派な神の指導者がバルナバでした。彼にとって一番の座、最後の座は誰が取るかは気にならなかった人でした。自分がしんがりになって、主の御名があがめられ、神様に栄光を帰することができるなら、自分の職位と立場はどうなっても関係ない人でした。

この大きい絵を見ていた人、このすばらしいバルナバが今の時代にも必要だと思いませんか。私たちの家庭にも必要ではありませんか。**主の教会は立場や地位意識、功労意識に気をつけなければなりません**。牧師はじめ、役員、そして、牧者や執事の職分はほかの人の上の階級ではありません。もっと献身し仕えるべき職分を階級で勘違いしてはいけません。そうすると、主の教会は墮落し始めます。今は大きい絵をみなければなりません。家庭を生かし、国を生かし、教会を生かし、我々の民族を生かす人、神の御国のために役に立つものになるためには、もっと多くの人を立たせるために、そして神の栄光を表すために、**自分をかげで仕える場に喜んで立つことができる人が必要です**。その人はどこにいますか。そのようなバルナバはどこにいますか。もともとこのような人の代表は我々の救い主なるイエスキリストではないでしょうか。悲劇の十字架の死を目の前にして言われたイエス様の御言葉を覚えましょう。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。(ヨハネ12章24節)」

多くの人々を救うために自分を十字架につけられたイエス様、みなさんと私とそのイエス様に従う弟子であるなら、我々は家庭内で、教会内でバルナバのような姿勢と行いをとるべきではないでしょうか。いまはバルナバを必要としている時です。まことの主の弟子を必要としている時だと信じます。

我らのクリスチャンプレイズチャーチの牧師、役員、執事、牧者、そして、全信仰の家族みんなが、バルナバのようになり、バルナバのように用いられますようにお祈りします。年を重ねていくほど、信仰が成熟し、成長してバルナバのように謙遜にキリストの愛を持って仕える人、人を慰め、人を励まし、人をよく立たせみなさんを通して、キリストの弟子が、素晴らしい信仰のリーダーたちが立てられますように、そうするために、まず我ら一人一人がバルナバのような成熟した信仰と愛のリーダーとなるクリスチャンプレイズ教会の全神の家族となりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン!